〈証言〉朝鮮人のみた戦前期出版界

―編集者の回想―

金亨燦 著

出版ニュース社

証言・朝鮮人のみた戦前期出版界
―一編集者の回想―

一九九二年一月二〇日初版第一刷発行　定価三、〇〇〇円（本体二、九一三円）

著者……金　亨燦
発行者……清田義昭
発行所……株式会社出版ニュース社
東京都千代田区三崎町三―二―四
電話（〇三）三二六二―二〇七六・二〇七七
印刷・製本……凸版印刷株式会社
造本……島津義晴

ISBN4-7852-0053-7 C0000 P3000E 落丁・乱丁はお取り替えいたします。

【証言】朝鮮人のみた戦前期出版界

——編集者の回想——

金亨燦 著

三一版 ユース社

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

証言・朝鮮人のみた戦前期出版界

―編集者の回想―

目次

序文

私にとって金さんは、私が岩波書店に在勤していた頃から逢った旧知の間柄である。金さんによれば、自分は勉学して将来「朝鮮のエジソン（発明王）」になろうという夢をいだいて朝鮮から東京に来られたが、やがてその志を変え、日刊工業新聞社に就職したのを発端として、ついで一九三〇年、二十四歳のとき新聞之新聞社に転じて新聞記者になり、新しい生活に踏み出されたとのことである。

つまり、本書の内容は各時代を縦糸にし、多彩な諸体験を横糸にして見事に織りあげられた独特の「自分史」である。「その真理と真実をざっくばらんに発表するのが、本書の意図である」とはっきり記している。しかし、察するに朝鮮人であるという点で差別感の強かった当時の環境の中で、金さんは如何にして自らの職能と職責を果されたであろうか。特に出版界の巨頭クラスの人々、例えば岩波茂雄（岩波書店）、野間清治（講談社）、石川武美（主婦之友社）などに親しく接して多大の信頼と知遇を得られたものか。

そして、自らの世世流転する人生航路として、目次にみられるように新聞之新聞社時代、日本読書新聞社時代、浪人時代、第一書房時代、日配時代と終戦までの京城時代といった具合に歩いて来られた。

回想記として長くあたためて来られたに違いないだけに、自己表現の欲求と情熱は全体に漲っている。私は同じ時代に生きて来たので、一しお興味をそそられた。同時に出版史の好個の一証言であり、

資料であることも評価した。乞われてここに拙文を寄せる所以である。

一九九一年九月

九十翁　布川角左衛門

序文……布川角左衛門

第一部

第一編　新聞之新聞社時代――一九三〇（昭和五）年～一九三六（昭和十一）年――……14

「発明王」になる夢が一転「新聞記者」となる……14
受付窓口の突破作戦……18
対談時の〝姿勢〟について……21
若僧が出版部長に抜擢される……22
昇進自祝の宴に苦労する……25
出版部初期の頃の態勢……28
定価販売制と「書籍商組合聯合会」……30
「書籍商組合聯合会」総会への対策……33
出版部内部統率の決意固める……33
社外では大物のみを狙う……35
部内の人事移動＝直系部員を確保……38
岩波茂雄先生と式社長……42
「満洲事変」以後（記者生活の背景）……43
茶房出入りは元老級……45
「出版部」は発展した！……46
「東京朝鮮ＹＭＣＡ」のこと……47
部長記者として油がのるまで……50
「男は度胸、女は愛嬌」＝日本人論……58
「出版欄」に社説コラムの新設……62
全九州書店繁栄座談会は成功したが……64
記念事業としての第一回出版文化展覧会の開催大成功のこと……67
展覧会は大成功だが……73
『出版年鑑』の巻頭論文〈出版界一年史〉剽窃事件……78

大橋達雄氏と私との関係……87
捨てる神あればまた拾う神あり……89
「二・二六事件」と私の転機……91
第二回出版文化展のこと……96
表彰式の代わりに留置場入りとは？……98
東京出版協会の業界改革推進と『日本読書新聞』創刊の胎動……104
伊香保・野間別荘における対談と奇縁なる女性関係……106
〝朝鮮人重役〟を忌避する苦肉の策……111
退社のための大芝居を打つ！……121

第二編　日本読書新聞社時代——一九三七（昭和十二）年～一九三八（昭和十三）年——……130

『日本読書新聞』株式会社として創立……130
「日読紙」発行の委細を公表……134
発行部数と用紙問題……144
石川先生から借金して株主となる……146
〝社長代行〟に登用されて……147
世界教育聯合会の臨時機関紙となる……158
元老級編集長たちの非常時体験座談会……158
「出版懇話会」誕生の母胎となった〝戦時出版取締りに関する座談会〟……160
官民全く同資格で「出版懇話会」を結成……165
創刊一年半で辞職する裏面談……166
「日読紙社」を正式に辞めるまで……169
李昌隣氏不当拘留のこと……174

第三編　出版懇話会——一九三七（昭和十二）年～一九四〇（昭和十五）年——……176

私の念願と「懇話会」存立の意義……176
内閣情報部との定例会に発展……180

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

陸軍と定期会合のこと……185
海軍とも定期的に会談……188
大坪保雄氏と國塩耕一郎氏……193
歴史的事実と「記録」の虚構性について……196
各種「出版懇話会」記録の〝正〟と〝誤〟について……198
出版懇話会は何を為したか？……213

第四編　浪人時節――一九三八（昭和十三）年～一九三九（昭和十四）年――……218

救いの神・石川武美（主婦之友）社長……218
山田わか女史一行と満洲・朝鮮へ……221
主婦之友社特派員として満・鮮へ……226
人生の岐路に立つ。わが進む道は……231

第五編　第一書房時代――一九三九（昭和十四）年～一九四一（昭和十六）年――……237

義理にほだされ、意外な入社……237
在職中に何を為したか？……247

第六編　「日本出版配給株式会社」時代――一九四二（昭和十七）年～一九四四（昭和十九）年……255

大橋専務に招かれて「日配」へ……255
入社当時の日配首脳部……259
〝適性配給〟とは何ぞや？……262
さらに強化……264
新設の「弘報課長」となる……267
戦時出版統制の強化――「出版会」発足……269
「日配」「文協」共に機構改革、戦時統制体制
売切買切制の実施と『新刊弘報』……271

『弘報』の陣容強化について……277
新社長に石川武美理事が就任……282
『新刊弘報』の公的使命とその内容……283
出版界の最高秘密会議で白根出版会室長と確執のこと……291
「読書会」運動も中途にして挫折……298
計画割当配給制下の弘報活動……300
白根孝之氏の謀略か？　憲兵を避けて故国へ夜逃げ……309
子供たちを置去りにして夜逃げ……315
『私家版・日配史』にみる私に対する下馬評と反証……317
『私家版・日配史』にみる第三者の目に如何に映ったか？……323
日配・石川社長と私の関係……331
正式退社は年末、長男を置いて引上げる……332

第七編　京城時代――（終戦まで）――一九四四（昭和十九）年～一九四五（昭和二十）年八月――……334

帰郷して考えたこと……334
総督府側と正式会見のこと……340
「朝鮮出版文化協会」設立の責任者となる……343
総督府官房の嘱託に任命されて困る……344
朝鮮出版文化協会の創立、専務理事となったが……348
『京城日報』理事へ転出、格下げのこと……352
赴任前に「京日社」を見学……354
腐敗し切った植民地の官吏……355
終章　人の運命とはこんなものなのか？……357

第二部

第八編　日本での六大恩人……366

〈はじめに〉……366
青二才から育ててくれた出版界の六大恩人……367
恩人先生との因縁経緯……367
式正次先生……369
西村辰五郎先生……370
大橋達雄先生……375
野間清治先生……380
〝野間精神〟について……384
雑誌・出版物の発行精神？……386
伊豆半島の野間氏を訪ふ……388
岩波茂雄先生……391
先生の座右銘……392
講演会の演士、突然の世界旅行……399
逸話四題……403

第九編　石川武美先生——**万人の水先案内**——……409

石川先生の代名詞は〝真実一路〟……409
〝真実〟こそ雑誌の生命なり……410
初対面……414
主婦之友社、七不思議の一つ……416
手帖と雑巾……417
偉大なる神通力……418
外出時は洋傘を……420
人と物を活かす力……421

右手の善行を左手に知らせない！……422
徳富蘇峰先生との関係……425
三十七才で国民新聞社副社長……428
石川先生の蘇峰観……430
社員が株主となる会社……432
東京復興第一の新社屋落成……433
先生から借金して「株」を……435
昼間にお邸へ案内さる……436
暁の四時に訪問すれば……437
先生の「わが父は農夫」……439
先生の百姓生活……440
新婚旅行も三等車……443
七十才で二等車を……444
特派員の肩書きで慰安旅行……445
敗戦の予言と覚悟……446
何でも、最後まで……448
『主婦之友』編集日誌より……450
天なる石川先生に捧ぐ……458
〔追補〕『わが愛する生活』について……460
あとがき……466
私の履歴書……468

＊可読性を考慮して、年代は前後しています。

第一部

第一編　新聞之新聞社時代

（一九三〇（昭和五）年～一九三六（昭和十一）年）

「発明王」になる夢が一転「新聞記者」となる

入社

〝朝鮮のエジソン〟を夢見ながら、東京遊学に胸を躍らせて上京した私だったが、わずか二年足らずで志を変え、新聞記者生活に入ったのは昭和五年の半ば頃のことで、日刊工業新聞東京支社への入社が始まりである。間もなく、その秋には「新聞之新聞社」へと、籍を変えてしまった。

同社は社長の式正次氏が早大商学部を卒え、米国留学中に関心を持っていた『エディター・アンド・

パブリッシャー』誌を真似て作った業界新聞社で、最初は新聞業界の記事を主として取扱っていたが、さらに飛躍を期して、日本の出版文化界の浄化に乗り出すとて、新たに〈出版部〉を創設し、その部員を募集したときに応募したのである。

この社でも、見習社員の給料は他社の如く日給一円、からだの具合が悪くて二日休めば一カ月で二十八円、三日休めば二十七円しか貰えない。そんな時代であった。

その頃の私の願望というか狙いは、給料の額よりも、日本の社会で、日本人と肩を並べて激しい生存競争に勝ちうる、自分の性分に合った活動舞台を探せるかどうか、が最も重要な課題であった。ところが、たまたま同社では出版文化界の浄化運動に乗り出し、〈出版部〉を新設してその拡大のために新社員を増員するのだ、という。その点に強い魅力を感じたのであった。

入社後、約一週間ぐらいは社内の様子を見ながら、今後為すべき仕事の性質など窺ってみると、だんだんと興味が湧いてきたし、また、自分の力でなんとかやれそうな気がしてきたので、永く勤める腹を決めたのである。

社長・式正次氏

式社長は、明治二十七年、福岡県柳川市に生まれ、伝習館中学を経て早大商学部を卒業。渡米してノースカロライナ大学の大学院に学び、「マスター・オブ・アーツ」の学位を受けてから帰国。初めは函館商工会議所の書記長を務めたが、もともと言論界に関心が強かったので、のち、「大正日日新聞」記者、「電報通信社」経済部記者として活躍したあと、大正十三年四月一日『新聞之新聞』を創刊した方

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com